



O.M. Essenwanger 著

## 「World Survey of Climatology 1B」

Elsevier Science Publishers, B.V. Amsterdam

424頁 1987年

定価 (円価約 32,000円)

良くも悪くもオーソドックスな本である。全体の構成は、次のようになっている。

1. Introduction
2. Frequency Distributions
3. Correlations and Linear Regression
4. Fourier and Spectrum Analysis
5. Smoothing, Filtering, Inter-and Extrapolation
6. Tests
7. Characteristics of Meteorological Elements

表題の通り、気象学・気候学における統計の手法の基本は、一通り万べんなくカバーされているとあってよい。数式中の変数の表示法が、普通の教科書とは少し違う使い方をしているところが多いため、一見した時に、取り付きにくい印象を与えてしまっているが、慣れてしまえば、なんとやることはない。この種の日本語の教科書としては、20年前に発行された、鈴木栄一著「気象統計学」(地人書館)しかない現状を考えると、より up-to-date で、より包括的な解説書として貴重な本ともいえる(但し、個人で購入して読むには、値段の高すぎる本ではあるが)。

この本を使い易くしているのは、実際の気象・気候資料を用いて詳細に解説された豊富な実用例(74例)であ

る。テキスト中に現れる分かりにくい統計の手法やその意味も、この実用例のおかげで、多くの場合、非常に分かりやすくなっている。例えば、スペクトル解析時に計算すると自己相関関数とそれに対応するパワースペクトルが、データの長さやトレンド除去の有無により、いかに変化するかが、図や表で細かく示されており、この本の実用書としての価値を高めている。

しかしながら、やや残念なのは、多くの研究者によって既に広く使用されているいくつかの新しい統計の手法(例えば、スペクトル解析における MEM や、時空間スペクトル、フィルター解析における recursive filter など)について、ほとんど言及されていない点である。また、最近頻繁に使われるようになった主成分分析の、気象データへの適用の際の問題点などの議論がほとんどないのも、物足りない。この本の目的が気象学・気候学における統計の基本(elements)を示すことにあることを考えると、これは、やむを得ないのかも知れないが、せめて further readings として文献の紹介ぐらいはしてほしい気がする。

考えてみれば、しかし、気象学・気候学における統計的手法は、それぞれの研究目的に応じて導入され、発展してきたわけで、ひとりの研究者によってすべての分野を網羅することなど、不可能に近い。古典的な統計の諸概念と、著者の特に専門である(と思われる)様々な気象量の分布特性の解説に的をしぼった著者の選択は、仕方がなかったであろうし、ある意味では賢明であったとも言えるが、一方では、この種の百科全書シリーズの限界も感じざるを得ない。

(筑波大学地球科学系 安成哲三)

### 昭和63年度(第25回)秩父宮記念学術賞推薦要項

**趣旨:** 秩父宮記念学術賞は、秩父宮殿下が、財団法人日本学術振興会総裁として、我が国の学術振興のために多大の尽力をされた御事蹟を記念して昭和38年度に制定されたもので、秩父宮殿下が格別に深い関心を寄せられた「山」に関する科学で顕著な業績を挙げた者に対して授賞を行うものである。その選考及び授賞については、日本学術振興会において実施している。

**授賞の対象:** 「山」に関する個人又はグループによる学術上顕著な研究調査の業績で、次の各条件を満たすものを対象とする。

- ① 山に関する学術的研究調査であること。
- ② 山における自らの実地研究調査活動を中心とするものであること。
- ③ 新しい知見又はデータの収集等により、新領域の開拓又は研究の進展に貢献すると認められるものであること。
- ④ 学術文献として公刊されているものであること。  
(現在印刷中等のもので、昭和63年12月末までに必ず公刊されるものを含む)

推薦の締切期日: 昭和63年10月20日(木)